

神・ヒト・死の儀礼

— 他界観念の用語研究 —

岡 本 恵 昭 (平良市総合博物館協議会委員)

(1) はじめに

「他界観念の用語研究」を書くにあたり、いろいろな方法論を試みた。一般的であるが、宮古島の村落共同体の midpoint において、いわば村レベルに生活現象を通して交流する「ハレのコトバ」・「ケガレのコトバ」・「ケのコトバ」という、3つの分類とそれぞれにかかわる用語を表出してみた。系統的なコトバとコトバの流れや相互のかかわりがあるわけではないが、出来得る限りの系統性や関連性に注意した。村落レベル・家本位のレベル・個々の人間・人格の精霊にかかわるレベルまで分類を細目化していき、シマにかかわる形で説明していくことにした。沖縄本島や八重山地方の習俗の解説は除外し、どこまでも古来からの地域の伝承と儀礼のそのままの流れと、筆者の体験と研究結果を客観的に述記したものである。

本論のコトバの表題と一つ一つのコトバの概念は、小生の責任で論記したものであることもお断りしたい。

聖の空間と他界にかかわる観念上のコトバは、主として共同体の祭祀用語の一部であること、そして、常に他界観念にかかわるコトバであることを前提とした。

例えば、本島のニライカナイについては当地での祭祀の中から、又、神観念の他界観念から異なった、あるいは同じ種類の話の中で注目してもらいたい。

次に、家庭レベルでの神佛の未分化の中でのコトバにも、屋敷の神々の分類や配置・構造上の異なりで説明していること。最終的に葬送儀礼用語や佛事・法事・供養・神願い・神事(御嶽での)についても、人生の通過儀礼の葬送用語を持つもの、時空的な以後の追善法要の件についても、以前に発表した葬送用語の一部をダブらせて重複されてしまったが、常に他界と再生(ステル)と云う観念予想を通して観てほしいので、あえて順次的に書いてみた。

以上、※共同体に関する信仰用語 ※家の内と外に関する信仰用語 △家の空間外の広がり空間 △聖なる場所と家単位のもの △そして家を支え構成する家族個人そのものに対するも △個人にかかわる聖なる空間と時間そのものを選出してみる。

宮古島の他界観念を知るために —コトバから観念する他界—

神と佛との未分化、天上と地底の未分化、水平志向と天上志向のクロス(交差)に対して、神の場合も人の場合も双分制度に応じて再生円環する。つまり、神でもよいし、佛でも良い意識を持って未分化の空間と時間の中で“あの世”を分類している。この双分観は、現世空間を考えていないので現世空間と時間を中心に、つまり“中月・ミヤーク世”から

みれば、三分制に変化して円く廻って再生（スデル）構造に移行して永遠の回帰をくりかえす作用（精神作用）－他界観念の宮古島の人々の持つ心性（信仰）である。

ここから、島人の人生観も、宿命論も、死と再生の創造も出発していると考ええる。以下、不連続の分類説明を紹介する。欠落した用語も勿論多くあるが、今回は重要なコトバを選別し説明した。

※共同体に関する信仰用語　－シマの他界観－

○根の神（ネヌカン）

根とは、物の根っここのことである。生きている者の魂や精霊（スピリット）の根っこにあるもの。始まりとともに物の根元、元祖、初神のことを「根の神」と云う。生れ根（ンマリニー）とも云い、魂の再生の聖地は根の神ともいう。根之の神と同じリウグ天。

○龍宮他界が天の上にあるという観念

リウグ他界が天上や海底の理想郷にあることはいたるところで規定されている。

○リウグ主（龍宮主）

龍宮神のことで神々を一人前として主と云う。

○リュウグウマンツアキニガイ（ツカサヤー）

旧暦三月のはじめの亥（い）の日に龍宮の海神をまつるツカサヤーでは龍宮への道を開ける祭式「リュウグウマンツアキニガイ」を行う。一年の各家庭の無病息災と商売繁盛などを祈る。

○リウグ七座（龍宮土座）

龍宮の天にある神のいる座は七つあるという。七座はイビのこと。幻想の聖は空間は七つという聖数を満数として七つの数の聖なるイビがある。このイビを龍宮七座と云う。

○天の座・神座（天の座敷・神の座敷）

万古山御嶽縁起の中でメガオバー（開創者であるシャユン）が魂を天の産に行きそのイビである神の座を拜むという。

○ツカサ（村の司）

共同体の各地域にツカサ制度の神女組織がありツカサは頂点に立つ神司である。狩俣村ではアブンマの下位に位するが、池間ではウブンマ（大母神）はサスの一人である。沖縄本島の根神やノロ制度と同様に共同体の神を司どる。

○サス（世ザズ）

サスは世願いにかわる神女制度、祖槽成の一人で島の神女の頂上にたつ村もある（島尻村など）。サスは、神を一人で背負って一人称の名前で祭を行う。サス一人ひとりに神の名がついて、神格一者のみを受け持つ。例えば「村ザス」、「ユーザス」、「家ザス」（家と個人の神にかかわるサス）などがあげられる。

○神力カリヤ

神がかりやとして、神の“ツヅ”が一人前になって、神女の守護神やマウ神（成巫）になって“神がかり”（神ダーリ）して神のことばを発声する。「ユタ」の名称を古くは「神がかりや」と呼んでいる。ユタは「死神がかりや」が少なく、ブソウズのユタと違って不浄の霊にかかわっていた。祈祷や家屋の願い、個人の健康願いは出来なかった。

○カンヌスマ・ニスマ

神の島（スマ）、ニスマ（根の島、他界空間）のこと。ニスマとは根の島の意味で、ともに対句。どちらかと云うと天上他界、海上他界より地底他界を云う。「根の島・底の島」ということばがある。「ソコ」「スク」も同じ。

○天の七座（龍宮七座）・（天上他界の空間）

天上界にある七つの座敷、天上他界をいう。七つの聖数は神の数や人の魂を云う。七座とは、幻想のイビの数で七つのイビを指示している。海底竜宮や天上他界の竜宮他界には、七つの数の神とその空間があるという。

○ヤマト神（大和神）

太和神とも表記される。ヤマト（本土、日本）から来訪される神々をそれぞれヤマト神と呼ぶ。大和神とは学問の神様であるので、村人の信仰は厚かった。漂着神であるヤマト神、刀や農耕具を持参して伝承した大和人の死霊は神として祭祀されていた。大和神カンカ主はカミーヤの神鉄の伝承と技術への信仰が考えられる。大和神への信仰は共同体の人々が持つ同一性と異質性を持っている。宮古島では、ヤマト神は文化伝播の主であるので、一種のマレピトであると云われていた。

○ニブス井一（太井）「ニブス井戸」

大井戸（インガー）のこと。ニブスとは、根所、根入り、底浅い井戸のことをいう。根所のことをニイドクル、ニブスとも呼ぶ。「・・・ス」とは、ここでは「入処する」「入る」とのことで、平良中学校校門近くの船底井戸（フナソクガー）も「ニブス井戸」の一井戸「カー」でもある。

○太井戸〔ネブス井戸・ニブスガー〕（インガー）

現在「ニブス井戸」の名称に変えられている井戸のことで、昔、目黒盛豊見親が与那覇原軍に戦をしかけられ、漲水（走水）近くの海岸まで敗走した時、井戸から出現した猛太に伝って戦を勝利に導いた由来や伝承がある。

○ツカサヤー（司屋・漲水神社）

漲水御嶽（現在神社形成の鳥居が立っている）のこと。島の創生にかかわる神々が祭られ、「御嶽由来記」「宮古島旧記」などに創生神話が記録されている。ツカサヤーの役位は昔は大安母（ウプアム）、近年までは漲水里の司が中心となったので「ツカサヤー」という聖地の名に代るようになった。

○唐の神（ウプユーの神、トゥの神）

古くから中国の楽土を唐と呼ぶ。日本をのぞく東アジアとしての中国の世界とその神々を唐の神と呼称する。唐迎い墓とは唐への志向として墓口が唐へ向かう方位にある墓地をいうことから推察される。

○唐の世（ユ一）大和の世（ユ一）

ここで唐は、幻想のミルク世の他界であり、大和の世は同胞という願望の同一性を指すことばであった。やがて、唐＝中国、大和＝本土（サツマ、本土）を具象化するユ一トピアの世界に移行していく。対象として「大離れ礁岩＝バナリ、前バナリ、バナリ・前バナリなど名称があり、それぞれの岩、立礁に名称と地名又は名称がある。バナリと呼ぶ岩には守護神名があり、海上安全の護りをその役割としていた。各離島にもバナリには神々の名称がつけられている。

○唐の神＝ミルク神 ミルクユガフー（世界報）

ミルク神のいる他界で、パイのスマとかも含めて大世のみのる他界の神である。宮古島では、「ミルク世」とか「ミルク神」についてはその意識は少ない。ミルク神やミルク世は、他の島からの伝来が考えられる。

○パイノスマ（南の島）

パイは南の方位を指す方角でスマはここでは幻想の空間で異様の文明を持った神々の住む島を云う。南の島への幻想は多い。シナフカ世乞いの神々もパイヌスマよりの大世の種子（サニ）を運ぶ大世積綾船で往来するという。

○ユリムン（寄り物）

海岸に流れついた大木やいろいろな種類の木に神が寄り来る時に流れついた漂着物が

ある。その寄物（ユリムン）寄木には神が寄せたものとして「寄木の主」の神がいる。ユリムンには、大木や木材、ヤシの実や他の珍品が寄せて来る。最初に発見してそこにミイマタ（マータ）のサンを差しておけばその物は所有者が定まったことが判別されることになるという不文律がある。龍宮からの贈り物であると言う。

○ウプユー（大世）豊穰

豊年のこと。時代世棚のことを云う。ユーとは物となって現世に表れるもの。種子から成長して作物の豊かさを人々（共同体）に分ち与えるもの。豊かさ＝実り多きもの、粟・稲・ヒエ芋・さとうきびなどの豊穰こそこの島のウプユーなのである。大世は龍宮他界、シナフカ世乞いなどに司どられている。

○ヤマトユー（大和世）

明治より歴史は薩摩の支配下に変わるのでこれをヤマトユーと呼んだ。本土の文化の下に大世を実現すること。ヤマトユーは、稲の国であり豊作物の豊穰技法を農耕具（金属）の技術の発達した親國の如く豊かさにあこがれた理想の島である。

○世乞い（ユークイ）

池間島のミヤークツツなど、それぞれ島の大世の神の守護と豊作を乞う祭りがあった。「ユンテル、ユンテル」の神女の円陣舞蹈があり、世を天より降ろして願う祭である。シナフカの世乞いは、海上より世積稜船（ユズミアヤプニ）が来訪して天下から世の種子（サニ）を分配するという神事で、年2～3回にわたって行われる。

○オーミューキ（青の他界）

オーミューのことと同じ。海上の彼方にあるオーの他界。これらの他界空間は今日では忘れ去られているが、古代から海の水平線上の青は幻想空間の海底の龍宮他界を指す観念を持っている。

○ミューガマ（アブ・ソクの場合）

ミューガンと同じ。水平線の彼方にある他界とは深井戸の意をいう。深い底のある井戸や洞窟の底にはアラ神、龍宮神が居るといわれ、ミューガマとはそうした穴所や洞窟のような暗いやみの色を持ったアブを云う。

ミュー（他界）の神で大渡主のことである。オー（青）のこと。青の他界は、①生者の魂を守る神々が守護神＝龍宮神としていること。②青色は神々の他界へ渡る海上の色彩のことで、海上、海底へと円を移しながら今の世へ来訪することを云う。③オーは龍宮神の居場所、社やイビ、墓所や御嶽に植生するクバの木の如き色をいう。

○ウプット（大渡・大海・海洋）

ウプ（大）、トゥ（外海、大洋）のこと、イナウの海上大渡という。ウプトは水平線上に引かれた波の華が立つ境界で天と地が分断され波動の源である大洋などである。大渡は海上他界、龍宮他界の幻想の空間がある。

○アラ神 アカ（赤神）（荒神）（新しい）

アラ（荒い）神のことで外から来訪する神々のこと。アオ（青）、シロ（白）、クロ（黒）、キイロ（黄色）、アカ（赤）の五色は古代の宮古の他界観念を表現する色彩を持つ。アオとシロは、聖なる色、アオスバの真主地。シロは、シラス、シラ、シオ、クロ（黒）とアカ（赤）は、死の世界の道のシンボル、キイロは、夕神の此の世の色。アラ神とは、悪霊や死の厄神の動く辻や地所空間であり、マジムンの居場所で生魂し、命や運気をうばい死に至らしめる空間であるという。境界や辻、四又の道や三又の道のつきあたり、聖地（御嶽）や神々の屋敷は平常ではアラである。

○ニツジャ（ニーラ・ネーラ）・（他界）

主として、根（ニイ、ネ）の底まつり、根所であり、海底他界や地の底、深い井戸の底を観念する他界そのものをいう。井戸のことをミューガマとミューとも云う。スク（底）の深い他界と天上を通過するパイプであろうか。ミューとは、古代語である「ニュー」・「ニフ」に同じ源を持つ。

○ニツリヤ（ネツジャ）

池間方言で古いことは池間島の民俗史（大井浩太郎）の中でニツジャ、ニルカナヤ、ネイヤヤを「ニツシャ」と称している。ニラカナイ、ニナイカナヤ、ニーラ、ネリヤ（根の島）等々の名称で指示された他界。

○根所（ネイドクル）

ネイドクルとは御嶽や森。イビなどを聖地や神の巖岩を神の聖なる空間として信仰し根所という。根所は御嶽、聖地であり又、ムトヤーである氏子（ファナー）の集まる籠り小屋でもある。類似することばに、根屋（ニイヤー）、元屋（ムトヤー）、ンマリニイ（生まれ根）。

○オー（青）（オウー）・（アフ）・（アオー）

海の色、青（アオー、オー）はアオーと表記しオウーと発声する。それらは海の名称でもあるが、神々の聖なる空間、居場所、波の彼方にある青色の他界を云う。波上他界が代表的な宮古島のアオである。

○テン (天、アマ)

天 (アマ、テン) は、古代日本学では「アマ」と呼ぶ。通常、沖縄本島や宮古島では、テンと称して天国「天に昇って」「天にあがって」云々と弔文や謝辞をのべている。「浄土」、「極楽浄土」とは云わない。

○ウイカ主

ウイカとは、ウイ (上) の方向にある聖なる空間を云う。ウイカという神役もあり、大主神 (ウパルズ神) と同格で天上志向の神観念を云う。ウイ (上位・方向・神の居場所) を指示し観念する。ウイカ主とは、天の神を主管する神女のことを云う。

○ウイカテン

ウイカとは最上位の方向にあるもの。空間であつたり聖地のことをいう。天神のことでもある、ウイカ主とは、頂の神のこと。
人間の頭部にあたる所をツツとウイカともいい神 (守護神) の出入口があるという。

○天の七座

ウイカ (天) の空間、天の座という他界に七つの神座があると云う。ウイカ天とも呼ぶ。ウイカ天は神々が垂直に昇り降りる他界であり、七つの神の座敷 (イビ) があるという。ウイカとは天上と同義語である。

○リウグ天

龍宮天とも書き、もっぱら海底他界を聖なる神の座 (居場所) として観念する。龍宮とは、宮古島では沖縄本島の「ニライカナイ」ということばにあたいする。他界そのものであり、遠來神-來訪神の居場所であり、人間の魂の依りつく場所。海上安全や豊漁、豊作、稔りの種子の有子聖地で悪厄の引き受ける場所でもある。

○アカトキ (早朝)・(あけもどろ)

暁の時、アカツキ、早朝 (ストムティ・ピヤーシ) の頃、ティダが昇り明ける時間。アカツキ・暁の時間は、水を汲んで一日の生命あるを神佛に感謝する。神々が社に帰る時間も「アカトキ」の一刻である。

○ユウカン

夕神、日没の頃に活躍する神々。夕神 (ユウベの神) と云う。夕占 (ユウラ) は夕神の神占いのことである。夕時、くれどきの時間を魔の時間と云い、「ユサラビ」と呼ぶ。夜はユウバンと称する暗やみの時である。

○アサティダ

父なる太陽、アサは父親のことを云い反対にンマティダは、母なる神を指す。アサティダは太陽神で男性的なシンボルを持ち、万物の生命を生育する力を持つものとされている。昇る太陽は生産神であり、農耕神であるが、ンマティダは生殖を司どり人々の運氣を定める月神（ツクガン）、ユウティダである母なる神である。

○ンマティダ

母（ンマ）なる太陽（ティダ）の神。地母神は母天太である。ンマティダ神は、子供を広げ育成して村の繁栄に加勢する。母系性社会にあつては、ンマティダの神は最高の神であり、頂点にあつて系譜をつくる。

○ミャークティダ

ミャークとは、此の世界である。現世を照らすティダ。ミャークとは天上他界の下にあつて、地底・海底龍宮の上にある中心の現在の宮古島全体、又はシマ共同体である。離島から観た本島はミャークと呼んでいる事も注目する。

○ゲソーティダ

地下他界、死者の魂の行く後世のティダ後生他界はニツジヤと呼ばれ、人間の魂が落ち込んで行く世界で、そこに後世ティダが魂を救い人間界に戻したり再生させたりする。

○ティダガガマ

太陽の洞穴、古くは「おもろ」に出てくるが宮古島にもある。成川村にあるティダガガマは万古縁起に依って見つけられた洞穴である。

再生して天に昇る方位に開口された幻想空間の洞穴であるという。

○ティダンカイガマ・パカ（友利元島・来間島・成川）

ティダ（太陽）を迎える洞穴をティダンカイガマ、太陽の洞穴と呼ぶ。友利元島に古くから「ティダンカイ」と称される東向に口を開けた墓がある。内部は広く権力者の墓と推察される。

○ティダウガマシ

通過儀礼の一つで、赤子の10日又は8日ソーズバリの日の早朝に東の庭で行う。10日ンテ（万産の日）、赤子を抱いて東の庭の方向に出て、ティダの光を浴びさせて命名式をする儀式がある、これをアガズティダウガマシと云う。

○東座（里の神）ザーの神

松原の東出入口、道の登り口にある里の御嶽でアガツサーと呼ばび、アサティダを迎える神を祭る。東座では、ティダの神、クルマ神、サトウキビなどの豊作を司どる神、里の神—培の神—が祭神になっている。

○マクの神 マクヌ主（マクヌ神）

里の神である東座の神で、神願いを仲介する「マクの神」という「空間の神」の座がある。マクの語源は「幕」の如く仲介になるもの伝達するもの、広い透明な布の如く張られたものであると考えられる。

○ヤグミテン・ヤグミ主

天の御座敷、尊い天用、天上界の主。ヤグミとは、尊い・偉大なるものをいう。願いフチに出てくるヤグミ主とは対句である。天加那志とも云う。ヤグミ天の座敷とは天上界にあるテダ加那志の神の座であり、「ウイカ主、ウイカ天」とも云う。

○テンの七座とリウグ天 —ウイカ天—

天の七座も龍宮七座も同じ海上他界。処分制の他界には、ミヤーク世と七座（ウイカ主とウイカ天）が双分化のままであったりするが、ソクの関係ではない。いつでも天上他界は垂直時に中核を持っているという考えがある。

○ナカビの神とミヤーク世

中天、大間の住む今の世。ナカビとは、現世のミヤーク世のことであり、生きている者が神々と交流をし他界をいつも意識して生活していた。日常的な生産儀礼も他界からこのナカビの現世へ乞われて運ばれるものである。

○ナカビ（今の世）

中日と云う。現世の空間世界、ミヤーク世と同じ。ナカビにはティダが昇り海上はるか彼方の水平線に消え、月の出入りと潮の干満があつて、人々は生活をくりかえす。中日とは、天上他界や地底竜宮、海上他界を分割する現世に位置するものである。つまり、双分観はこの世とあの世の中間にあつて、どちらへも往来する世界が「今の世」「ナカビ」である。

○ムムカン・フサの主

百神、草（人間）のツツをいう。百人の神格をも指す。百人の神々、百神と呼ばび、共同体を構成する家の女神はすべて何らかの神のつづを持たねばならない。つまり女性は神への奉仕者であるという考え。百神は総べての神々（人々）を云う。百は満数である。

○ソバアギの神

狩侯の神で、天上界の神々をこの世へ道案内する神。本土で呼ぶ「サルタヒコ」はサダル神＝ソバアギの神女をいう。ソバアギの神は頭に赤白のサーズを被り八巻の結びをする。ソバアギムトウの司神で祖神ではない。巡行して祖神を先達して案内し、天と地を結ぶ仲介の神女、ハライの神の役割を受ける神女である。

○アティアンマティダ

祖神の一人で、ウヤガンのフサ（歌）を創生した神。アティアンマティダはフサ（神謡）にも謡われていたのであるが、そのイビと神の場所はこれまでわかっていなかった。狩侯の新里ミユートザス（夫婦のユタ・トキの主）が神懸りして「道開けをする。アティアンマティダはウプムトゥの左側のガマ（洞窟）にイビがあったと云う。

○ウプルズの座

大主は狩侯では座の神。池間では大主御嶽の神。ナナムイ御嶽とも呼ばれ、最もヤグミ神加那志を祭っている。池間島の中心になる御嶽で「オコンマ」他ナカバイ、アーグ主5名が中心になって拝む。大母は島の司の頂点に立つ神女である。

○ウプヤマ（大社・フムイ）（西の御嶽）

フムイと呼ばれ狩侯集落の背後にある社又はイリのウタキ（西の御嶽）と呼んで、社（丘陵）の西北方位にあたる社を最も神聖な場所として何人も立入りを禁止された場所である。

○ウパルズの運氣座（ウンキザー）

池間島、佐良浜、西原での中心になる開創神、大主御嶽の神々である。島中の人々の生命（いぬつ主）・（フーの主）の神々が座り、年中行事の中心は島を出る船の海上安全と豊漁その他に運氣を総じて司どり、島中（本島も含めて）タマスぬけ（疫病人や事故にあった人の精魂を強く振わせて元の身体に魂こめ）することが出来る場所であると云われている。

○ナナムイ（七柱・森のこと・大主御嶽そのもの）

池間系の共同体の大主御嶽を「ナナムイ」ともいう。七つのイビがあるとされている。卵生神話のある御嶽由来縁起があり、又、島中の生の運氣や死者の霊を集めてトウツもする神が「ウパルズ」＝「ウパルズ七柱の神」である。

○ザーのカン・ウパルズ

狩侯の座と聖地御嶽の主神。座とは村人が祭りの時に集まる場所で聖なる広場であり、

祭祀の終了又は始まり、夜籠の出発地点である。

座の御籠り小屋の神々を司どるサスは、ウパルズ神の役を持つテンドウウパルズの神。

○フサの主

狩俣・島尻で「スサ」とも呼ぶ神歌、神謡を云う。フサの主が神歌を謡う時は神女達、祖神も相對してハヤシ又は後謡する。相互に掛けあうこと。合い重ねて謡うことがある。フサの主は、祖神祭で定められた場所、時点でのみ先導して謡い始めを出さない。あとはアブンマの一人称で神のフサを先導する。

○世の主神（ユーヌヌスカン）

ユーヌヌ主神を祭るムトウは狩俣では世の主神の神女が集まる「シダティムトウ」（志立元）、豊穰を祈る神格の高いツカサ神＝世の主ツカサが中心となる。島尻では、世の主ツカサが祖神祭でも、普通の祭祀でも中心で最高の神女にあたる。豊作物の豊年を司どる神女のこと。島尻の祖神では、世の主ツカサ、水の主が世ザス、水の主のサスとして祭祀の中心になる。

○水の主神

水の主の神は、狩俣では水を司どり井戸の神祭りに中心になって祭祀を司どる。ムトウはナーンムト（仲嶺元）に所属する、夏祭（アーブー）ではナーンムトウで祭りをすすめ、冬祭りでは、祖神になって水の主（ツカサーン）の名で行動する。井戸の祭祀でも水の主のツカサーンが中心となる。

○ヤマト神（大和神）

狩俣でも島尻でも大和神の神女はヤマト神カンカ主（鍛冶神）と同じくイビを持ち、そこを司どる。狩俣には大和神のイビがウプヤマにあって学問や大和世の文化で招福神として祭られる。神役はヤマトイビを拜むウヤパー（神女）と云ってもよい。

○カジ神のイビ（カンジヤーの香炉）

カンジヤーヤという鍛冶を仕事にする家では、ガジヤーの神を祭る神棚香炉がある。いわゆる仕事の神で、カジヤーの神にあたる。これをカジヤーのイビ加那志として年の定まった日に一族の祭りをする。カジヤの祭りのことを「フィゴ祭り」と呼び、市内では工場のフィゴ、神棚を舟立御嶽に祭る。

○ニツジャカニドヌ（浄土のエンマ大王）

後生の門神である金殿（カニドヌ）。金戸野とか、加根戸野とも、砂川双紙にかかっている。金殿（男神）は、金属の製造加工の技術を司どる神であるし、カチャーの主

神であるが、ここ狩俣の金殿はニツジャ後世の門をひらく神（男神）である。

○グショウ七座（後生七座）

死した後の魂の行く座敷のこと。この世は「ミヤーク世」と呼ぶ。死と共に断絶されるべき世界—後世へ住世することを言う。七つの関所のことである。もう一方では天の七座（ナナザー）とも、竜宮七座とも呼んでいる。天や後生には七つの天の空間があると考えている。

○リウグ天、リウグ七座

龍宮といえば、海上他界を云い、海上安全、航海安全を祈願する。他に死海の魂の行く先の魂の居場所を云う。龍宮ということばは、宮古島の神観念で最も良く使用することばである。他に天上にある「リウグ天」等々がある。

○ニツジャ赤牛

根所の他界に住む。赤牛は根所の守り神である。赤牛は古くから龍宮他界に住んで神の守り主としての用途があったと云う。宮古島では、ウシ（牛）は神々につかえるものである。

○ニツジャ ムムチョウ（百帖）のカン

根所（地底、海底龍宮他界）の中で百帖の主神がおり、根入りする人間の魂を記帖する。宮古島の他界観の中でニライカナイ、ニルヤカナヤ等のことばは「ニツジャ」、「ニイヤー」「ネリヤ」「根島」に代変されています。海上他界、水平線の彼方にある浄土、そして龍宮ということばが地底、海底に志向される。

※家の内と外にかかわる信仰用語 — 香炉に祭られる神の観念 —

○世の神の Kouro・ウマヌパ（南の方位）の世の主

家屋の中にある Kouro の神を祭る「世の神の棚」がある。神棚に白布をかぶせて百日間は使用しない。世の神の棚に山羊や牛の角（ツヌ）が箱に入れて祭られている。これは早朝に捨てたものと云う宝物である。

○スタティ主の Kouro 元祖の香炉（青色香炉）

先祖神を祭る香炉、家系の始まりにあたる元祖を祭祀する香炉。ムトウゴウロとも呼ぶ。佛壇に祭られる香炉であるが、ムトヤーである場合、初代を始めとしている香炉である。

○トクル神のクウロ

屋敷の東方隅にあるイビをトクルといい石香炉が祭られている。トクルは一家族のすべての人々の健康や旅立ちの安全を祈願する場所（イビ）であり、祈願場所にトクル神を通して祭られているという。家族の一人一人がマウ神を持ち生涯にわたって信仰すると同様にトクルのイビも供されて信仰される。

○屋敷神のクウロ

トクルの神は一家を守護し、屋敷を守護する香炉のことを屋敷神の香炉と云う。イビは旧9月の吉日の早朝に海岸に降り丸い海石を捨ってくる。又、屋敷ニガイや戸主の変化があり代変りがある時、吉日を選んで主人が海浜に出て選んで持ってくる。ハマユウ（ビーング）を植える時もある。

トクルの香炉又は、神の依りつく海石の三つをイビの香炉を云う。イビは屋敷の東角にあって、東の方位に対してイビを置いている。アガイティダを拝み、家内安全と息災を祈願する。家族のための願い、個人の神願いをする。その場所はソーズの場所という。ウイナギ（上の方向）ウイカ、アガリである。

家の内にある死の儀礼葬送用語 一葬祭用具にみる死者の観念一

○マイズクイ（前机）

灯明や位牌、香炉などを供える墓口に置く屋根つき的小屋をいう。古くは机を墓口に置いて供物を飾っていたが、やがて屋根のついた前机になり、灯明や香炉、茶湯用品や供え物がおかれるような葬儀用具となった。

○灯明

トウミウのことで一対、他界の道を照すマエズクエに置く。昔は葬式旗と一緒に一対吊げて灯明かざりにした。灯明はブタ油、ナタネ油、ローソクに移行する。タイマツを透明としたり、トボスを種子としたりする時もあった。

○カンパニ（神羽根）（神着）

神羽根といって、死者の着る白いソデなしの衣装。白衣装で死着がつけたり、かぶせたりする。位牌を持って葬列に立つ長子もソデなしの白着物を着けていたが、今日では着する人もなく喪服に変化している。

○仮ゴウロ

本香炉を佛壇にある元祖香炉に対して、仮香炉はまだ元香炉にならない香炉を云う。本佛壇の中央に番炉があり、仮に香炉が置かれる場合は白色の素焼のもので、死着が49日忌や開眼式の時に仮香炉は捨てられ、本香炉に移る。

○白コウロ（仮香炉のこと、葬式のイミの間置かれるもの）

葬式の時、葬儀屋が供える香炉。墓地の仮小屋、前机にて使用する。葬送用の仮香炉が黒色から白色あいの香炉に変化したのは最近のことである。それまでは、黒の素焼きの香炉が使用されていた。

○パカのコウロ（墓の仮香炉）

墓での白い香炉、昔は墓でのミイゴウロは仮香炉といった。素焼きの白色で近來はみられないが開眼（フルマシ）の法事の時、割られている。処分されることを前提にした香炉。古くは洞窟墓地には香を焼いたあとはない。線香は道教の影響でたてられたものである。

○イパイダキキン（位牌を持つ長子着用の着物）

葬列のとき長子が白位牌をもつ。クロチシは葬列の時被るもので今日では使用されなくなった。位牌ダキ着物はソデ切りの白い布を上着より着けて、白ヒモにて前結びする。前身ごろは襟なし。

○クロチョウ（黒色の上布）着物

黒色の上布でつくられた着物をいう。黒帖は宮古上布の着物で喪に服する時は黒色一点の黒布を頭より被る。親族も黒帖である。参加する女性はサーズを頭より被り結びをしない。

佛壇と祭具について

○白イパイ（白位牌）・（白木の一本立）

新しい佛になった者（死者）の俗名や法名が書かれた葬式位牌のことを云う。一本は墓地の入口に前机（マエズクイ）の中に安置し、もう一本は家の佛壇の下にある仮祭壇に安置する。いずれも葬儀屋が用意する。古くは杉板に白紙を巻きその上に個人名を書いて・・・之霊とした。

○一本立イパイ（位牌に法名を書く）

白木の一本立の位牌のこと。墓の位牌と家の祭壇に祭るヤーイパイ（家位牌）がある。49日に焼いて処分する。

○内地式のイパイ（本土より取り入れた位牌）

本土の佛具店より取り入れたくりこみ式の位牌のこと。札が数枚入っている位牌。

○トウイパイ（唐位牌）

沖縄本島の様式で唐位牌と呼称されている。この位牌は高価なため沖縄本島にて買い求めてくる。佛具店で購入する時、法名や俗名を寺院にて点眼（てんげん）してもらう。いわゆる魂入れを行って佛壇に安置する。

佛壇と佛具（香炉）について

○ベツダナ（別棚・仮棚）

正統に祭られない別神（先祖のこと）は佛壇から離れた部屋に棚（祭壇）をつくる。すなわち佛壇を二つもつ場合もある。

○ユブヤーガマ（祖来は小屋）

ユブヤー（神の屋）と呼んで畑、屋敷のすみに無縁佛を祭る。別に（カンヌヤー）、（キタティ神）、（ソイヤガマ）の名称もある。

○カンヌヤー（神の屋、無縁佛を祭祀する小屋）

ユブヤーと同じく無縁佛を祭る。家系が断絶した屋敷に小さな小屋をつくって、位牌と香炉、花生け、茶湯器等を置いて祭り、縁者があれば供養するが、無縁者とかかわる神の屋は参拝者が全くなく祭られないので寺で永久安置。

○イパイダナ（位牌棚）

ユブヤーのタナ→神の屋と同じく無縁佛を祭祀する。仮の佛壇とも云う。又、裏座につくられる位牌棚のこと。本佛壇と一緒に祭られない佛や先祖を別棚に安置しておく。後日、本佛壇の位牌と一つになるもの（兄弟とか、出戻りの娘などが一緒に入ることができる）とがある。

○ブツダン（佛壇）

佛壇とは、古くは「マウ棚」とも呼び、先祖の位牌を安置する棚で、主として二番座に南向におかれる。佛具店、家具店より購入する。佛壇は、古くは棚上に位牌を置いて香炉を拝むもの。香炉だけのもので位牌のないもの等々が時代と共に祭壇式の佛壇として二番座に常設された。

○コウロ（香炉）

線香をたく香炉は、石香炉、砂香炉、素焼の香炉、ツボヤ焼の香炉（陶器製）などがあり、砂や灰を入れて線香を立てる。線香は火をつける時に香炉に立て、水神などに願いごとがある場合、火をつけずに置くだけにする。古くは砂を盛り、シャコ皿や二枚貝の深手のものを香炉とした。又、石香炉はイビそのものを四方角を切って香炉とする。

これは、御嶽の香炉、近代になって香炉は佛具店より入手する（アオコウロに統一されている）。

○ンタゴウロ（土香炉）

古い昔の香炉で素焼きの香炉を云う。古くは個人的理由からマカイに灰や砂を入れたマカイコウロが使われたり、空きカンに灰を入れる仮香炉が用いることもあった。御嶽には、島尻村ではンタゴウロがあった。

○キタティコウロ（別冊香炉）

本佛壇の中央に置かれる香炉とは、別に香炉が並んで置かれる場合。別位牌を祭祀する時（位牌を分けるとき）本家よりの位牌の一部を分けて別棚に分けて香炉を置き、花立、茶湯器も新しく（キタティ）設けて祭る。

○ウブガンコウロ（祖先神の香炉）

多良間島では、三十三年忌以上経った祖先香炉をいう。位牌はない。ウブ神は、先祖神として意識して祭祀するので、本佛壇の左手に香炉、花立、湯のみ祭具を置いて、位牌は立てない。香炉のみがイビになっている。

○ヤスクガンコウロ

屋敷神を遙拝するための香炉。屋敷神とは宮古島では「トクル」・「トクルイビ」・「ヤヌカン」・「ヤスク主」などと同じで、屋敷神のイビは自然石、海石（サンゴ岩）一形のきれいな丸形のもの— などがある。

○マウゴウロ（マウ棚に祭る白香炉）

マウ神（個人の守護神）を迎えてから死去するまで祭る香炉。マウ棚におく。マウ香炉は宮古島のみの守護霊の観念で個人がある年齢になってから家ザス（サス・ユタ）に依ってマウゴウロを供し祭ってもらい、生涯一世にわたって信仰する。

○マッフアメシ（枕メシ）

人が「アマス（死者）」になると、床を変えて寝かし頭上にマカイ香炉と水、茶、ダンゴを一對にして供えて枕飾りをする。“枕めし”は—わんに盛ったごはんに白ばしを立て、みそと塩、ソーメン汁を膳（高膳は老人のみ）に置いて供えものにする。

○タカオゼン（高膳）

タカオゼンは長老の食膳として、尊ばれた者が用いるものである。近来まで、埋葬風習があった時代には、80歳以上の老人（ウイピトゥ）に使用した一人用の高い供膳、

御膳に故人の生前に使用した食器を描えて持たせた。御嶽に用いるのは、島尻・狩俣がある。他村は「ボン」・「ゼン」と呼ぶ

○マッフアコウロ

マウゴウロ（生前に自分自身の守護神として供してマウダナに祭る香炉を云う）をマウ棚から下ろし、死者の枕元に置いて線香を立てる。守護神とのかかわりはこれで終了する。マウ神の祭器はその人の一代限りの神であり、信仰対象物であるので、葬式の日、墓へ持参し捨てる。

葬送と厄除け

○スウーパナ（潮の鼻）（ミンガパナ）

スウ（潮）大海から押し寄せる波の質（つづ）に乗って神や世の花が来訪するという。旧暦の三月三日に女の子や子供達は、海辺に出て波の花、潮にくるぶしを洗い、身体の一部を洗い清めて厄払いをする。年中行事の浜降りはこの由来に依る。浜に出られない老人や病人には潮水を汲んであげ、身体に足年の一部を洗ってあげる。葬送の戻り、海に入って波の花で清めたり、みそぎ（シニヤナ）をおとして帰る。

○シンモツダイ（進物台・供膳）

墓に納められる。死後の食物（米の盛り合わせ）を供えて、墓中、棺前（頭の方位）に置かれる木で作った盆である。四方形に白紙をはる。

○ミイマタウギャ（三つ又ウギャ）

三又の如く本数を三つ、三枚の枝葉の先端を左結びに結ぶ人で、悪霊を除外させるという。又、悪気や魔物を退散させる呪力を持つ。本島では、マータとかアザカを用いた魔除けを使用する。葬送の時や口拂いの時使用する。今日でもマータは使用されている。厄拂いに使用される。

○ウギャ（アダン葉ヤマカヤを用いる）

ウギャとは尖ったものの呪具や道具で、ウギンは海底に潜って魚などを突き刺す用具である。ここでは、アダン葉、マカヤの葉を結んで厄除けとしたり厄拂いをする。アダン木そのものも墓口に置けば、悪霊を招き入れないと云われて木根から切り取って置く。ウギャとは魔除けである。ウギャとは魚をつく鋭いもりのこと。先のとがった魚具（モリ）から想像されたものである。

○サオ・タケサオ（竹竿）

四流旗を吊し、昇り旗をつくる時、ダンチク、ダディフなどが用いられた。又、葬式

が通る家々の門には竹竿を横にして出入口をふさいだ。

○サンムヌ（サン・魔除けの呪具）

サンとは、マカヤのソラ（先端）を一本又は三本にして結びつけたもの。X字はガジ
とって、外からの邪気を入れないまじないであり呪術の一種である。

シャコ貝（ニゴウ）、クモガイ（ユーナモーモ）、その他先の尖った形をした貝類（水
字貝）には、マジムヌ（魔もの）を入れない呪力があるという。使所（フル）戸口、豚
小屋などの入口に吊り下げ畑に立てるミイマタウギャなどがある。

○生の青木マッフア（生木の枕）（枝のついた緑の葉づいた枕木）

死者の頭の上に枕木として、ガジマルの木の固い枝木を葉のついたままで使用するこ
とがある。柩はドフ木（デイゴ）、松材・杉材と変化していった。

○マッフア木（枕木）

墓の中に棺を入れる時、コロのように丸木を棺の幅に切り取って二本置き納棺をする。
棺を安置する時に置く丸太木である。生木の枕木は、死者の霊を草木の再生（スデル）
するように念じて故意に生木の枕を使用すると考えられた。

新佛（ミイカン）の神願いについて

○ニフンブン（根入り願い）

根をふむと云って死霊が後生へ行き、成佛すること。極楽世界へ渡ること佛になるこ
とを云う。先祖との和合や、成佛出来ない神を和合させることを云う。ワゴウニガイと
も云う。先祖の霊、系統から離されたいわば無縁佛を正しく祭祀し、「成佛」という観
念の中に入れることを云う。

○フダミブン

フダムとは、根をおろすこと、祖先神となる事である。ヤフダミ、ヤフダミヌカンと
も云う。フダミ帖も先祖になった彼の地を踏んだ人の魂をいう。

○ユルンブン（許されて安定した祖先と成る）

ユルンブンとは、現世に何か借りがあつて成佛が出来ない。迷える精霊が祟りとなつ
たり、現世の子孫に心配されている執念を断ち切る事。執念の想をユタがハンジ（判
断すること）して、精霊の心の迷い、魂の迷いを救済すること。ンミヌバン（胸につか
えたこの世への執着心）、成佛できないこの世への怨念等をンミヌバンと呼び、ユルン
ブンは「成佛」をさせること。

○パナシブン

生きた人間の精霊（スピリット、気持ち）にあたる「生きた魂」の死者からの離しを願うこと。生者と死者の別れと別離させることをハナシブンの願事と云う。死者が生者の親しいあまりに接近し寄りつくこともあると考え、又、死者や生きた人の魂を持ち去って行くと云って、そこからの離しをしなければならない。不浄なるタマシイの怨念を引き離させること（成佛）。

○カギフナス

開眼のこと。満中陰のこと。カギフナスとは不浄なるものを清浄にすること。開眼（カイゲン）と云って、白木の位牌を本尊前の位牌—先祖と一つにすることをいう。入魂式をすることに依って、葬式用具、仮佛壇祭壇のすべてを取り払う。同類語に「トジメ」「49日忌」「フルマシ」の用語がある。

○ンミヌバン（胸の悩みの解き願い。胸とは肝のこと）

心にかかわる想い、悩み、苦勞、悩みがしみついて離れない死者とのかかわりを離してあげる願い。装具が悪い、キガズンで気が病む、うらみをうける心配と不安、同年の友達であったことなど「ンミヌバン」と云う。

○カイゲン（開眼）（魂入れ、入魂式）

開眼とは、カソビババカーズとか、49日忌のバカーズとか、ソーズバリとか称されて忌明けの意味を持っている。自位牌が先祖の位牌に代わり、祭壇や忌みがソーズ（ハレル）日なのである。開眼（かいげん）式は、死後3日、7日、9日のゾーズバリの日や土日を選んで行うようになった。

○トズミ（開眼）

墓参を終了すること。古くは一日早朝の墓参と夕方の墓参が一門を引きつれて行われていた。49日忌をもって昔は開眼式をして、「トジメル」ことをする。そこから墓参の閉め、終了を意味した。宮古島だけの風習と佛教儀礼が結びついたものである。

○シンジウクニチ（49日忌）

親戚の者の供物を香資として持ち寄ってやって来る。77忌のソーズバリの日、死者の靈魂が成佛して祖先と一緒に成るということ。あの世での魂の浄化が完了し、忌中の喪制度に服す日数を49日と定める風俗に従って墓参りにあけられている。49日で「神人のバカーズ」を儀礼として行いユタをつれて祈願をさせる。離別に生きている人々との離別であり、神は神として道を異にして、人の道に戻り来るな！という神と人のバカーリである。49個のモチが「プニモチ」として分配され共食される。

○ムムカソーズバリ（百日忌の満散の法要）

百（モモ）と云う数字は、満数をいうことで、百ヶ月の新佛への供養をこの日をもって終了させマンサン（満散）をするという。百日声（モモカグイ）といって、ユタに死者の「神ダイ」を聞くことを百日忌に行うと良いとされている。又百日忌は、近來になつて行ふようになった佛事で、昔は49日忌までがトジメであり、満散であるとされていた。今日では百日忌を供養する人々が増えてきた。すべての佛事とユタがかかわる行事（儀礼）である。

○イヌイヌショウコウ

一回忌の法要。一周年の命日を「イヌイヌショウコウ」と呼ぶ。死去した日よりの一年目のめぐり回りにあたる年、命日を行う一周忌近來は習慣づけられている。始めて迎える一年目の命日で、この年から命日は新佛を中心に行う。

年回忌とシウコウについて

○ミズティヌシュウコウ（三年忌、三回忌）

三年目の命日を三回忌の法要と云う。死去した年を一年目と数えて三回忌は行われる。三回忌は三年忌と呼ぶのが正式の習わしである。

宮古島では、三年忌より先祖と共に命日焼香を併修するという習わしが出来てきた。

○七回忌（ナナティのシュウコウ）

七年目の故人の命日をナナティのシュウコウと云う。五回忌法要、九回忌法要もある。

○十三回忌（イミィシュウコウ）

十三年目の忌日（命日）を「十三回忌」の法事として盛大に行う。古くは、この十三年目の年回忌で法事は終了した。今日では、二十五回忌・三十三回忌の法事がある。

○三十五年忌、三十三回忌（ガバシュウコウ）

年回忌法事の最終のもので、盛会の法要がある。三十三回忌は終わりの年忌焼香、とじめの焼香として祝儀の如く朱色の料理を使う。すなわち「大焼香」「トジメ焼香」とも云い、盛大なる佛事をする。

○ウブガン（元祖神の香炉を33回忌で分ける）

ウブ（始めの佛初代の元祖）の祖先神を云い、多良間島では33年忌以上の年代の古い佛をウブ神として左手の端の最上段に香炉と花立てを置く。現在、多良間島血縁元祖を受け継いだ家が祭りをする。多良間島では、ウブ神の香炉を立てて佛壇の左上に置いて祭られていることに注目することがある。

○シュウコウ（焼香）

法事の解きに線香を立てたりすること。佛事に関してのみ「シュウコウ」と云う。シュウコウヤーに行くとは、年回忌や祖先祭りに参加すると云うことである。昔はユイマールで巡ってシュウコウ（先祖を拜む）をした。シュウコウは、今日では皆集まって持ち寄った「モチ菓子」「ヤサイ」等の供物を並べて一同が拜むことを云う。

○ジンゴウス（団子状のもの）ミンヌクダージ

煮た芋やメリケン粉と呼ばれる小麦の粉で練り上げて丸めつくる団子を「ジンゴウス」と云い、無縁佛の為に供えたり、先祖のみやげ（ツト）にする。お盆の送り日に団子をつくり、無縁佛や各々の祖先神に持参してもらうのである。

○ツト（土産品）－死者へ持参させるツトの場合

死者が持つ後生（グショウ）への土産品のこと。タバコ、タオル（白色）、ハンカチ（白色）、針と糸、ウチカビ、（紙銭）など、所持品としてではなく、あくまでも土産として先祖に分け与えることのできるものである。ツトは、後生では物々交換が出来ると云われ、子孫が多ければ多いほどツトが多かった。

葬送用に使われる祭具道具について

○ナイパー（すり鉢のこと）

棺を墓中に納めるとき、墓の中に深鉢四皿をナイパーと呼んで棺置き台の脚として置く。その鉢に水を入れ「サスカ」という棺を安置する台に置く。ナイパは、素焼のすり鉢を使用していた。水を入れ、虫除けにする目的である。別称ナイパはすり鉢のことを意味する方言であるので、代用品にソバ碗が用いられることもある。

○サスカ

柩は墓室（玄室とも云う）の中央に頭を墓口にしてサスカの上に乗せて安置する。サスカとはその棺置き台のことを云う。サスカの脚下にはナイパーを置き、水を入れておく。

○メイキ（ナーベタ）

死者の名前を書いた白布を云う。老人が持ち葬列の先頭に行く。里や村ではすべての家々からユイマールを出さねばならない。参加し協力する人々がいて葬送儀礼は出来るものである。葬式ユイと共に老人達もこぞって葬式の参加を喜んだ。

○オーズ（葬列の先華には長老が手に持ち、オーズは五枚、七枚の白、青、赤の旗が使われていた。）

葬式旗のこと。5枚、7枚の、9枚の布旗。色旗（紙や布でつくる）などがある。オー

ズとは、長い経分の書かれた布旗のことである。古い時代は白紙をつないで長い布のようになった。戦後、白布を引き裂いた長布が旗として使用された。

○ガン（龕）ピンザ（旗竿・龍頭の旗棹）

四法印を書いた旗をオーズと呼ぶ。メイキという故人の名前を書いた旗をセットにして、一本一本の旗をつるし飾る棒を云う。頭部に旗掛けがあり、その上に龍頭の彫り物があって、大変に荘厳であった。オーズをつるし、葬列の先頭に立つ人が持つ棒のことであった。

○グシャン（後生杖）

杖のことを示し、後生に旅立つ時、持参するものとしてグシャンが供えられたり、墓前副葬品として持たされる。

○灯明（トウーラ）

四角の灯明に白紙をはり、白色の細長い細紙をたらしさげ、飾りにする。ガンピンザ又は竹棹に二本さげて、墓の左右に置く。

○ナーバタ（メイキ・名旗）

メイキバタ（名記旗）のことで故人の名を書く旗である。長寿者の年齢順で旗持ちが決まる。「故○○○○之柩」という文字が書かれた白旗をメイキバタという。オーズの中で大切なものである。

○サバ（ゾウリ）・（アツツアー）・（アダンバサバ）

一対にして墓口に飾り置く。死者が此の世へ往来する時の履物になる。サバは正式にはゾウリであり、鼻緒には白布又は白紙を巻いておく。

○ピキムン（友引の日、サルの日）・（ドス・カタ）

死者への供儀の儀礼で「引いていくもの」を象徴とした。死者に寄りつく悪霊（マズムン）としてトリ、鳥（生きたままの鶏）、バッタ（カタ）、人形などが用いられている。

○オサーズ（白布）（白サーズ）

サーズ（白布）は、死者の柩をつつんだり、ユーサガイにする時に用いる。老人はサーズのヒモ繩を用いる。前卓にも白布を用いる。

白い長サージは、故人の氏名（俗名）を書いたり、四法印である経文を書いて、竹竿にさげ吊して行列の前に歩いたりする。四十九日の満中陰の法事の時まで白布の机で食事を供える。

○サカナ（供えもの）・（添えもの）

神への供えものとしての生魚や煮魚、唐揚げの魚は神佛への最良の御馳走である。大漁願いのカツオの加工食やサシミなど、新しい墓や新佛の供儀にも豚肉と同様に魚のナマスが供えられる。

墓地で供える祭具及び儀式

○酒（サキ）とウサイ（五水・御酒・御五水）

酒は御五水（グシー）と呼んで佛前に一対で飾り、酒に対して相伴するものをウサイとか「ヤサイ」と称して、刺身やアイズ（あえもの）を料理する。アイズには酢のものを好んで用いるという。

○ウコウ（線香）・（黒線香）・（センコウ）

線香のことで、沖縄製のピサゴウ・ヒラコウと内地線香（カバスゴウ）と二種類に分けられる。宮古島でも沖縄製が近年になってから使用され、神や佛の願事、御嶽や海浜へ出て願う事あれば、ピサゴウ（黒線香）を用いる。黒線香は一ヒラ（一片）が6本の節目があり一片を二つにわけて用いたりする。内地線香は香ばしい線香といたり、焼線香とか一本線香とか云う。

○タズ（タイマツ・火縄）・（ピーナー）

墓参やハルシコウの時、火をつけて保持する火縄のことである。ワラで縄をつけ、火種子にする。カヤをタイマツ状にして火種子として、そこから線香をとす。松やにトブシという木片もあった。

○水ガメ（墓に持参し置いておく水入れのカメ）

水まつりとも云う墓参り、新佛への墓への朝夕のつとめは、生れ井戸から生家の用いる水をタグに入れて頭上に乗せて運んだりして、墓におかれた水ガメに入れてその水を使って茶湯や花生に用いたりする。

○アライパナ（洗い米）・（パナユニ）

洗い米のこと。米をパナと云う。洗わない米については「マズユニ」・「パナ」と呼んで区別する。御願には「マズターラ」と称して五稜を代表する供え物であった。佛前に供える米は必ず洗ってから用いるので「アライパナ」と呼んでいた。3回又は7回も洗い清めて「洗米」は供えられる。

○マース（塩）

塩（クガマース）については、供え物としては、洗い米と一対で飾られ、あらゆる法

事、願事（佛事や祭祀）に供えられる必要なものである。塩は海の幸のシンボルでもあり、又、清浄にする“清め”の作用がある。

○砂（シナグ）・（パマンナグ）

香炉の代用に使用されたり、盛られて神々を祭る聖なる空間をつくる。又、砂は不浄なものを埋めて浄化させる働きがある。砂丘墓地や捨て場には海岸のヒダにあるスナのある場所が葬地になる。浄化再生させる砂はウブ砂と云って本土では産室（シラ）に使用された。砂香炉は昔風で、神事に用い御嶽や里神のイビの前に供えられる。佛前には台所のカラハイ（灰）を入れて用いる。

○砂石（砂シナグ）（砂岩－琉球石灰岩）

砂岩とは、石英や長石などの砂粒状の岩で出来たものである。墓石の積み石として用いたり、墓地の内室に敷いて死者の不浄をくさらせ浄化する。砂岩が洞窟墓の囲いをする。砂岩の積み合せて境界をつくることも注目されねばならない。

○モチ（餅）・（ムツ）

モチ米を蒸してついて出来た食品である。祝儀や法事に自家製のモチをつくって供え食べる。イモで作ったもちもある「イモモチ」、粟で作った「粟モチ」もあり、主として米のモチが神に供える最高の供えるモチである。

○イズ（ニギリメシ・イモネリのニギリ）

ニギリメシは円く大きくつくる。赤豆を混入したり、芋ねりにして赤豆を入れて円形にボールのようににぎり出してつくる。コメで炊き出したイズは、円くにぎられたバナナの葉につつまれて分配される。

○トウツキ（お通し）

トウツキとは遙拝することで願い事がかなうことを云う。お通し願いとは遠方に向かって願い事をコトバにて通達する願事である。

○ユンナキ（読むような流れ歌で泣くこと）

ナキユン（泣き読む）とも称される。泣き歌である。トウツキ（通し）ということばにあるように、死者の別れの時、泣き叫ぶがごとく、又しのび泣く如く、うたい語り、魂よばいをする。「ナウチイガ」・「ンゾウナムヌ」の一例がある。

○ダキトマウ（夜伽ぎ）－ユトギとも呼ぶ－

死者に肉親や子供達が付添い、夜を徹して泣き明かすこと。泣きながら別れのことば

を故人に向かって話しかけることなどがあり添い寝（死者と床を並べる）を共にすることを「ダキトマル」と云う。

死者は一夜をダキトマルによって胸に想いを持つことなく全て忘れてしまうということであろう。ダキトマルの儀式は夜に死亡した時に行いカチャ（カヤ）を吊して、その夜をダキトマルとする。

死者への願いと儀礼について 一葬送からの儀礼と用語一

○ヨウシブンニガイ（二代養子願い）

養子が三代に引き継いで一家の先祖にあることは、家系がよくないとして、男子の長子が誕生し家系を相続させんと願うことである。

長子が早死にしてしまう原因。養子継ぎが三代に直系に相続することをきらう願い。家の系統相続は長子の男子が相続者となるが、女子のみ子供の場合、養子（ムコ）を取って、ムコ養子に一家系を相続する。三代とは次世代も孫世代もムコ養子で相続しなければならない場合は、三代養子ブンといって、長男に継承してもらいたいと云う願いをすることである。

○プニカミ（骨かみ）〔ガニバリズム〕の名残りか？

プニ（人間の骨）を喰らいに行こうと云うことばは葬送の時に使う用語で今日はすでに姿やことばの伝承を失っている。プニカミは、葬式に出た家が豚をつぶして参加者や葬儀に集う人々に豚汁をふるまうことから由来すであろう。

○ヤスルハギ・ウメシ（メトハギ）

旧盆に使うもので、打紙（カミ銭）や箸に用いる。野原で切り取って長さを調整して使用する。先祖はこの箸を使って食事をしたと云われ、その風習は今日までも続いている。

○ハルシュウコウ

ハルとは「野原」「畑や村境」の原っぱを云う。畑や野原で墓地へ向かって遙拝すること。ハルシュウコウと云う。旧7月7日のタナバタ祭り、旧盆の迎え、旧十六日祭には村人は自分の先祖墓地へ向かって遙拝する。供物はそこの野原で広げて御馳走を共に食する。ハルシュウコウとは、墓前に参拝する今日ではあまりない。

○マウ神降し ー 死の儀礼 ー

死して葬送をする日。マウ香炉を降ろして枕前に置き香をたくという。マウ神と棚をやぶりに墓地に捨てたりする。一代限りのマウ香炉は戸主（ヤーヌヌス）が早々に棚よりおろす。

葬送の儀礼 ー再生への願いー

○マウイビスティ（マウイビ捨て）

マウ神の香炉のすべてを捨てる。マウのイビ石も一緒に墓地へ持って、墓内に捨てるのである。今日では葬式の当日に墓地の庭に置いて開眼の日に焼くことになっている。

○ムヌダニィ（物種子）

五穀（主として粟・麦・米・大豆）を種子（サニ）として白紙に包み、三角形に折りまげて死者のフトコロ（バタフル）に入れる。また、佛の種子（サニ）のム字を書いてもらい、後生（グショウ）にて畑作をする種子として使用されるように云って入れておく。

○バッシ水アビシ（別離の水あびせ）

死者に水あびせをすること。シニ水とか別れ水（ミヤークバッシミズ）と呼んで、「さかみず」を用いた。身内の問い合わせで選ばれた人が水に塩をかけて死に水をつくるサカ水で死者の背中に三度かけて終了し、あとは、身内の親しい人が全身を浴水させた。今日では、アルコールで身体の一部をふくのみで終了とする場合もある。

○スティ水、バキ水

いずれも死者に沐浴させる浴せ水のことである。ミヤコはこの世のこと、現世のことで「宮古世」と呼ぶ。バキ水とは別れる水の意味で、再生への儀礼である。若水のことをいう。

○ハマウリ（浜下り・湖水あび）

葬式の帰りに直ぐに海浜へ出向き、そこで行くおしや素足を海水につけ厄落としをする。これを浜下りと云う。今日では清めの塩や塩水で手を洗い清めて不浄落としをする。

○ダビワー

ワーとは豚の供儀を示す。ダビワーとは、葬式に供養される豚のこと。ダビに行く、葬式に行く、参加するなど関連用語がある。

○ダビー（茶昆）（葬式のこと）

ダビという言葉はインドのサンスクリット語で火葬を意味し、骨はガンジス河に流して葬送の儀を終了する。いつの頃から「ダビ」が葬送用語に入ったか知るよしもないが、今日でも通用することばある。

○ブソウズ（不浄）（精進日）

死者が出た家、家族の人々は忌中に入る。いわゆる「喪」に入り、不浄（ケガレ）の中で故人の成仏佛を忌を精進した生活をしなければならない。いろいろなタブーがあり、その中で忌明けの精進晴れの日を迎えなければならない。開眼式や四十九日忌の満中陰を終了して、日常のハレの日を待つわけである。

ブソーズよりショウジン（ハレ）の日への通過儀礼

○ソーズバリ

開眼の日、49日。開眼の日（ソーズバリ）墓地の飾りを一切に焼拂い、カギフナス（きれいにすること）をする。この日では、49個のプニムツ（餅）を参拝者と親族が分けあって食べる「食いわかれ」をする。

○ソーズ（精進）（ショウジン）

ソーズ（精進）とは、不浄（ブソーズ）よりのことばで精進すること。タブーやその地域の守るべきしきたりを守り、ひたすら忌み籠もることをいう。孝行のために一心に成佛を願い死者のために精進していく。

○四つもの（四つ物の膳）（供膳）

法事や七日忌の当日、高膳や角膳にフッチャーメシ（盛飯）に白ハシを直立に立てソーメンや中味の具のある汁、サシミの皿、天ぷらやトウフ、大根などのウサイ（スー）を四皿として膳に配して供える。これが四つもの、ゆうつ（四つ）で供膳のことである。

○ソウズバリ（精進晴れ）

死した日より49日間、又は百日間マンサンの行事を終了することでイミズ（不浄、ケガレ）がハレると云われていた。昔は三年忌まで祝儀や神祭りに参加することはなかった。喪服制度の影響であろう。

○カイゲンフルマシ

「開眼」と云って、死者の靈魂を成佛化して先祖の佛壇で祭ることを意味することばであるが、入魂式と同時にイスジから離れソーズハルをなした。墓で供え物（花一輪とか一切の飾り物）を水で処分することを「ふるまし」という。

マジムン（異常死、崇り神）の系譜と供養

○ユラリカン（不成佛の霊）

ユラリルとは、迷う、道に迷い生き死の場所を見い出すことが出来ない不浄な霊（精霊）である。成佛出来ない精霊は迷い巡る無縁佛や崇り神のように生きた人に供養をし

てもらいたいので「サワリ」をする。ユラリ神は供養することで成佛する。

○ビョウインバン（病院で死去した人の魂）

入院が長く病気で死去した人の魂の一部はまだ病院内にとどまり、そこから出ることがゆるされないでいる。魂の未完成さをユタが判事したり、家族が安心しないので、長期の入院にわたる死霊を抜いて供養する。

○水子（流産死）・（流れ子）・（カンヌサー）

0才～7才までの子（童）が死去すると、神の子（ヤラビガン）の名目で処理（埋葬）される。神のサーとは狩俣では古謡に歌われている神が誘い込んだヤラビ神のことで、古くはアクマとかヤラビガンとか称して村の境界の外にある捨て場に埋める。水子は、現在では流産児を云い、親の墓の側に穴をほって入れるか、洞穴に入れて石で囲いをして捨てるように粗末に扱う。再生を願う意味である。

○アクマ（赤子の死体・水子の霊）

水子やケガ・病気で死去したヤラビ（意）の死体に対して粗末な処理をして埋葬したり、風葬のために村境の洞窟に捨てかえりみない。アクマとは、生まれても死産がくりかされる時、死霊はマジムンの接する呪いと考え「アクマ」といった。

○キガズン（怪我死・事故死）・（水死人）－異常死、正常ではない死を迎えたこと

海や沼で死したる人をキガズンと称し、遺体は浜から押込んで棺箱に入れて仮墓地に葬った。キガズン墓地は村に必ず一つ、二つあった。この墓地は昔は、マジムンの墓地として近づくことをしなかった。ユタを招いて行く。ユラリ神、ユクシ神、アクマの神となる死霊となる死に方。

○マジムン（魔物）（フレモン）－「不成佛の霊」・「ユーレイ」・「マズムノ」

その他の異類動物－

マジモノと同じく、人をまどわし、邪魔する気を「マジムン」と呼んでいる。悪霊の接触するところ、人の生き魂は抜き取られる。運氣を欠き、生気を失い生々しい魂の發揮が出来ない。沖縄本島では「ヤナムンバレー」と云う。

死霊に対して成佛を祈願する「神願い」

○カサンバンニガイ

（カサニガイ）合ね願い、併修供養のこと。年忌や命日、焼香を合併して願うこと。

○リウゲニガイ（その2）（龍宮神への願い）

キガズンや自殺者の霊を和たまにして龍宮神に助けてもらうもの。龍宮神願いは龍宮他界をけがしたとして豚を供儀することによって「ワビ」をして許してもらい、成佛すると云う。

○ワビニガイ（リウグサギニガイ）

今日では、航海安全と大漁豊年を祈願する。事故死（自殺者）をキガズンの団弥をたち切るニガイで、ワビを通して許してもらう。

○パナスニガイ（離れ願い）

死者の霊が生まれた人にとりつくことを断ち離れてもらう。つまり、成佛してもらうニガイ。

○ヤーバナリ・ヤスクバナリニガイ（抜きっぱ）

ヤーとは、部屋とか家内の空間か場所からの離れ。ヤスクとは家屋敷の境界から死霊や祖霊が離れてもらうニガイ。（パナスニガイとも呼ぶ）。ここでは死霊との別離のことを積極的に願うこと。

○ユルミブン（成佛）（浄化） - 成佛する昇天する -

迷った魂（靈魂）をユラリルと呼ぶ。こうした成佛出来ない靈魂を成佛（ユルム）させる神願いのことをいう。

○ワタマス（入魂）（魂入れ）

和魂（ワタマシ）と云い、死者の迷える靈魂を入れ魂の入った状態にすること。開眼も云う。「ミパナピラカス」葬地よけ死者の迷った魂を佛壇のイパイ、香炉に入れ、点眼式（佛式）にて行くことを云う。

○タマスウカビ（魂入れ）（和魂のこと）

タマシイ（死者又は生者のタマス）を身体内に込めることでマブイゴメと云う。魂招き願い、石を拾ってくる。タマスウカビフルは便所又は大主御嶽に行つて、タマスツキを願ってもらう。

成佛への願立て

○ワゴウブン（神の和合願い）

ミウトワゴウブンとは夫婦の和合相愛の仲をとること。死者と元祖が和合する願い。これを元祖和合の願い（ブン）と称す。

兄弟和合ブンは、兄弟の神の精霊の入魂や供養を行事とし行うこと。近來は年回忌をもって供養をつとめる。

○神ガイ（声）

後世ザス（ユタ）が死者の思いや此の世の人々への話しかけを神がかりして云う。

○ヤーキニガイ（家系の正統を願う）

ヤーキとは、一家系の先祖の神願いを云う。ヤーキの系統を正しくする。不足分を願うことなどをヤーキニガイとして佛壇の前で行われる。

○カンユクミブン

先祖や神々の“ねたみ”にあうこと。ユクミとは裁判すること。

○ヤフダミニガイ

ヤフとは（ヤクドシヤクツキ）厄のある身体や染まった魂の開放を願う。厄歳には、生れ歳にあたる人などがヤフネガイをする。その他、年中病気や事故を起こして運氣が無い年や、気の下り年にあたる人を厄佛いをする。

○プーキウサギ（村佛い、スマよりの厄佛い）

プーキ、プーキスとは、風邪のように流行する病のである。年中行事の中で共同体をスマと呼び、スマの内部に悪霊や邪気、病気が伝染させないように豚を殺して願いをする。

○スタテイブン（元祖からの系譜づけをする）

スタテイルとは、物事を生育させる。念願の成就の意味。仕立てる。初代を立て祭祀すること。元祖のスジ（系譜）を捜し求めてこれを継承させるがために「スタテイブン」がある。元祖を招聘して後継ぎにすることもスタティのニガイである。元祖和合ブン（願い）をも「スタテイブン」と云う。

○ンチファンジイファニガイ（ヌギパ）

ユタ用語は、方位（空間）よりの魂の引き込み、脱出を云うことは、脱空間のこと。「ンチファ」という名称は、本島の信仰用語で抜いていく、奉還の為にお供する位牌・遺骨・魂抜きなどについて用いる。

○ミイグショウ（新佛・新しい先祖）

宮古ではミイグショウと呼ばれる死者の霊は49日忌又は、12日、1回忌、3回忌、3

・年間にわたる死者の住む浄土（他界）を云う。

・後生に対して、亡き人格者への愛着や想いが新鮮であること、記憶が新しいこと、今までをミイグショウのうちと呼ぶ。

○ガバァグシウ

ガバァとは、古いということばで老いである。ここでは、13回忌、33回忌以上を遠い先祖神のあの世という。

○ミャークパナリブン

ミャーク（此の世）。生きていた現世の人々や親からの離れ願い。肝にかかる死者の迷いを離れさせ「此の世とかの世（後生）とのトイ（エト）ばかりをする。」…成佛の観念の一つが見られる。

○ミイズシウコウ

1回忌まで開眼、49日忌、百回忌があり、1回忌又は3回忌までをミイグショウに25日、33回忌を神願いに対する供養や儀礼を意味する。（供養する）

○ガバァシウコウ・ミイシウコウ

若焼香は、49日忌より、3回忌、7回忌、老いたという古い先祖達の焼香は33回忌を云う。

○ピンガンシウコウ

春秋の新暦の彼岸（ピンガン）の一週間に寺飾りをする。又先祖へピンガンの報告をする。本土よりの佛年儀礼が入ってきた。ただし墓へ行くことはしない。

ボン（旧盆）と供養

○タナバタ（ストゥガツ）旧7月7日

旧7月7日をタナバタと称し、先祖の供養盆の辛口のため墓の清掃、洗骨、移葬、佛壇の移転などする。洗骨はあまりやらない島である。骨が移葬される時、特別な事情がある時に墓をあけて女達が井戸の水にアワモリや塩などを入れたりして、頭の方から足の骨へと順次よく洗い清めていく。「カキグナス」と云う。

○ボン（旧7月13日～15日までのウラボン行事）

旧暦の7月13日より15日までのウラボンと云い、祖先を迎えて接待供養し、一家が集まってウラオシの行事をする。盆行事は地方によって3ヶ月間を盛会におもてなしをする。先祖と残された子孫が交流しながら供養する。

○プトキイツキ・カミツキ

旧7月11日より30日までには旧暦7月の月をプトキ（佛）ヅキ、プトキツクと呼んで、先祖供養にかわる行事をする。墓の祈祭納骨もこの月を選んだ。

○チャーイリチャー

豚肉を使用した食事で、佛事に供えるための料理で、豚の血を食材に混入して豚の肉や中味・内蔵の混ぜ合わせていたため料理する。これをチャー（血）入りチャー（混ぜる）の豚肉料理のことを云う。

○ナカミノスー（中味の汁）

豚肉の中で中味と呼ばれる豚の内蔵の腸の部分を中心に小さく切り刻んで豚汁の具とする。豚の中味汁の供養は佛前に供える最高の料理でもてなしたと云う。中味汁と云う。

○インーマイ（芋ねり・ねりいもにぎり）

芋はさつま芋や田いもなどを煮て、これを練り上げ芋練りのにぎりを「インーヌイ」「インヌイ」と呼ぶ。田芋はきんとん状に煮てつぶし、芋もちもにぎり状に形をととのえる場合もあるが、これは「インヌモツ」「インムツ」という。インヌイとは、練りイモを固形化して供える食器である。

○グサンプーキ（杖の代用とする長きプーキのこと）

グシャン・グサンとも呼ぶ「杖」のことである。グシャンと使用とす。長いサトウキビの一本、一本は旧盆中に相対して左右に供えられる。グサンプーキは、杖の如く長いキビのことでこのキビを杖にして、後世から去来するに用いるという。

○ナマス（料理の一種で、酢の物・ヤサイを具にして酒のさかなとすること。

サシミなども云う。）

ナマスとは、生魚を「サシミ」とし、ウサイ（おかずの一種）として供えられたり、酒座にふるまわれたりする料理で、昔は皿の代用に二枚貝の大きなもの、シャコガイ（アジクヤ）を用いたりした。

○カラザカナ（煮魚・油アゲの魚の姿煮）

カラとはここでは、油であげた油あげの魚のことを指して、カラザカナと呼ぶ。

久松村などでは、海よりの魚の姿煮はそのまま祖先や死者に供えあげることが大切なことであるという。魚は、海の幸を意味し、日常品にはなかなか姿のまま食することはなかったという。後世では、このカラザカナを一匹そのまま供えあげることが、最上のもてなしである。

○グソーパナ

新佛に供える色花は昔からクロトンなどであったが近來キヤーギ木や菊花に変化している。アカベナー・クロトン・ガジマル・フクギの葉・キヤーギ・クロ木のソラなどがある。生花になった時代、菊の白や赤の大輪が好まれている。

キヤーギ木、クロトン、ガジマルなどを後世への供花として供える花で、旧盆には野に植えたソーロンバナでヤスルハギの枝花や茎を使用する。

○マウの花生け

昔は、福木の葉を生けたが（狩俣）、今日ではキヤーギ木、黒木、ガジマルの葉などを花生けにした。マウには、自宅の庭木から根の生える常緑花木を朝早く、木の枝の頭上部分（ソラ）を切り取って用いた。月の始め、ツキタチ（1日月）と15日（ウイメ・ジウゴニチ）に変換する。造花を用いることはしない。

○火の神花生け

火の神を花生けは、キヤーギ木（イヌマキの茎）を使用したりした。不浄の時節、葬送線香の日、火の神に捨てる。又は、火の神の香炉。

死者の供養儀礼と通過儀礼

○クジー（サキ）

グシ（御五水）（御酒）のことばが「サキ」に発声され御海（アワモリ）になる。ウンサキである。先祖に供える茶・水・花・米・塩の他に御五水として「御酒」が中央の盆に供えられる。

○三日ソーズバリ（ミッカシュウコウ）

葬式のあった日、死した日数を1日目と数え三ヶ月の早朝を「ミイカソーズバリ」と呼んでいる。ソーズバリとは「精進ハレ」と書いて死者の靈魂が初めて生家を訪れる日とされ、早朝の墓参り、ムト行きに「ミッカソーズバリ」と呼んでいる。その後焼香、供物である“にぎりめし”の共食をする。塩、みそでソーズバリをする。

○七日シュウコウ（ナンカソーズバリ）

此の日、初七日忌にあたる。墓参の復重箱（もち一重、おかず一重）、水、酒、茶湯を供え、一同墓前に焼香して持参したタイマツの火を消して、持参したごちそうを食べる。残さない。分配は平等にくばる。御初（ウハツ）は供える。

○九日バカーズ

9日目に「バカーズ」と呼んで生きた親族や血縁との別れがある。「死んだ人は神の

道へ行け！ふりむくなよ！生きたものを守り、マジムンになるなよ！」とバガーズ（別れ）をする。離し分の願いフリがある。神人のバカーズでもあるという。

○カンピトウバガーズ

カム（神）＝先祖と人間とのバカーズ（別れ）のことを云う。死んだ人の魂が生きた人間や生霊に祟りをおよぼすことをおそれ、生きた人の魂を墓や死者の魂から離して別れの儀式をする。

○キジャイ（法事）

キジャイとは焼香のこと。先祖の命日や法要・佛事などがとり行われることをキジャイ（祭り）とも呼んでいる。キジャイ焼香とも同じ意味があり「法要」全般のことを云う。

○ツナギブン（継ぎ願い）

神願いの中で“継承”を祈願成就させるもの。ツナイデモラウ・先祖の位牌に継いでもらうということ。他よりの祖先と本家（ヤームトゥ）の先祖代々に継承して欠くことのない世代をつくることが目的のカンニガイ。

死後の他界空間 ー浄土への道ー

○カンヌチョウ（神の帖・神の帖符のこと）

百神（ムムカン）と云って神々の役割の中に生きている人々の魂の運気を司どりその宿命の長さを記帖する。これらの役を持つ神を「帖の主」とか「神の帖」とかいう。帖（チョウ）はチウボ・ンシ（肝）の帖とか、運氣座にいる神名でもある。アツママー御嶽は宮古島の人々の帖の主神で運氣座の神々を祭っている。

○ゲショウ七座

後生の座敷のこと。七座と云う他界の空間が幻想として信仰されている。神の七座・龍宮七座も天の七座も他界のひろがりを云う。

○テラ（寺）

宮古島での葬式は、大方が佛式で行っている。寺へ通知する人のことをテライキと呼んでいる。寺に葬式をたのみに行くと云って必ず二人が選ばれて行く。他にテラは聖地であるという説があり、本島では葬地・洞窟（ガマ）をテラと考える場所もあるが、宮古島ではテラは島尻に「チラ御嶽」、大浦村に「ガバデイラ」・「シイデイラ」など御嶽がある。

○ニッジャウプンツ

後世（死後の他界）への通り道で北小南側の住屋御炭のウラにあるアブを云う。その他に平良カトリック教会の前に浄いアブがあり、墓地になった場所もニッジャウプナカともいう。

○ミュウガンのスサ（島尻村での祖神のフサ）

島尻の祖神の時、4日間の葬があり南静園近くのミュウガンと呼ばれる聖なる場所にてフサを住む。ミュウガンの祖神祭は三日目にあり、夜通し祖神達は海岸沿いの道を通ってスサ（クサ）を謡む。ミュウガン杜での神話をミュウガンのスサと呼ぶ。

○シニウヤーン（死に祖神）

祖神祭に参加した終身のウヤガミは、死しても祖神の姿を現した死霊となる。シニウヤーンといってその役は、祖神祭の時に出現して、生きて神役をつとめた祖神と同じ動作をくりかえすという。したがって祖神祭は死んだ祖神の霊をなぐさめると云われる。

タマスの行先は！ 観念について

○タラマウプツカサ（多良間大司・祖神）

狩侯の祖神祭4日目に「タラマ大ツカサ」のフサがある。仲屋マボナリの伝説を神歌しフサノにして謡う。狩侯の祖神祭では死にウヤーンと呼んでテンドウウパルズの前バナタに立って死にウヤーンの神女と相対して謡う。

○ウンキザー（運氣座）・（龍宮座）

生きている魂は人間の気を動かし、運氣を発動する。そのタマシイは七つとも呼ばれる数が分置され、それぞれ人間の身体の内ですと云う。魂や気をフーの主と呼び、ツツ（頂点）よりツツの主がフーを与えて魂の気を発するのである。

○池間ウパルズの神とウンキザー

池間七柱ウパルズの神は、生きている魂も運命の長短を司どる役割を持つと云う。ウンキザーは、七柱ウタキにもあり病気やケガで命があぶない時、魂に力をさずけして、ブヤウケ・タマシウケ（受け）をする。ウンキザーの神は池間ウパルズまで魂が迷っておれば救われると云われ、ユタにタマスウカビ（マブイワーシ（沖））をしてもらうと元気になると云っていた。

○イスツ主（磯の神）

海辺に立って、立神に似た岩を観る。離れ岩礁が分布して、その間を船が出入りする。ソスヌ主、イスツ神は、それら岩々に宿る神々であり、それぞれに名前の異なる神がい

て船を安全に通してくれると云う。

○フーヌ主

プーキとは、フーと同じで運気の気力のことを云う。フーの主は、辻の神とも云い、人間の真頂に乗って運氣である魂を動かし、人間を元気にする。フーとは気のエネルギーである。

○セダマス

人間の身体には七つのタマスがあるという。タマスは病気などすれば脱け落ちるといわれ常に魂を支え、力づける気がフーヌ主である。セダマスは、人間の元気なしるしなのである。健康であることは、常にセダマスを働かすことであるという。人のタマスはナナダマスと信仰している。

人間のタマスについて —そのニガイの名称について—

○49個のシニダマス

人間の死にあたって、その人の死に行く魂は7個であるが、死者が骨となり墓の主になればこの死者の魂は49個の小石で拾われると云う。死者（先祖一人につき49個の霊石をもって精霊の一柱とする）の靈魂は49個。

○ヤフバナリニガイ

厄を拂う願い。厄年、生れ年、73歳などの人生の通過儀礼に於いて、厄（ヤフ）・ウマレヤ（生れ歳のこと）。これを拂い清浄にして無事息災なる年を祈願する。ヤフとは、身体に着して離れない不吉な出来事や病気を云う。

○トウツキニガイ

トウツキとは祈願が通ること。遙拝する神がおがみにことを云う。トウツキとは、“祈りのコトバ”の祈願がコトバを通して、神に通達すること、あるいはフツが通り願事が成就することを云う。トウツキアということばには御里の方位へ向かって遙拝することを云う。

○ゾウフツニガイ

ゾウは、家屋の開口のことである。間の方を左手で神願いをする。門口一家屋敷の安全や繁栄はまず、人々や客人の出入りする家門の神（ゾウヌカン）が司どるという。ゾウフツニガイは、屋敷のタミニガイの事をいう。

○ヤスキの厄・生れ年の厄拂い

厄のこと。厄を拂い、病気や事故を防ぎ、かつ拂うことを目的とした願い事。

○カギフツハライ・ヤナフツハライ

良い事、吉事の物語り。良い口、ホメ口は凶事につながるフツが入る。ヤナフツが入る。

○神ツキヤギ（神に追われる・神がかりになる状況）

ツキヤギとは、悪霊やヤフ（厄）病神にとりつかれたり、又神ダーリ、神之に追われる精神状況を云う。依霊現象を神ダーリということで、神ツキヤギも神ダーリの一つである。強く神の主張が心身の生理をおかした時、神ツキアゲ（ツキヤギ）と云う。「ツキヤギ」とは、ツキアゲ・神々に追いかけることを云う。一種の強迫神経症の様子に似てくる。

個人のタマスに関することーハライとニガイー

○ドウダミニガイ

ドウとは、胴体「身体」のこと。もっぱら健康にがいや個人にかかわる厄拂いを云う。池間島では、「マビドウダミニガイ」と云うニガイに相似する。個人の健康祈願である。

○ヤーキニガイ

家サズの神願で家族の人々の健康や安全、壮年の順調なること。又、家族の厄拂いについて神願う。

○パマニガイ（龍宮にがいのこと）

1. リウグニガイ 大漁祈願祭
2. パマウリ 旧3月3日の浜降り
3. ムスルン・ムスソーズ 害虫流し
4. パマニガイ・リウグ座より死者の魂を受け取るということ

○カギフツニガイ（ほめことばの拂い願い）

ヤナフツウに対して個人の成功や昇格に依ってほめことばやカギことばが家族の人々に入るとそのために多くの人々の目や口が入り、富者の運気の不安定とフー下がり状況になると云うことで、カギフツバライをしてもらう。

○水バライ（ロバライのこと）

大神島や大浦村では、ヤナフツバライと云って神ザス呼んで家庭に悪口を入れたこ

とをわびフツを拂い出すのにタライなどに水を入れ、夕方、道路や村境に持って行って捨てる。水バライとも云う。

家空間の聖なる場所と豊穰の願い

○シラソーズバリ（10日・8日ソーズバリ）

シラは、白不浄とも考えられ、それ自体が別火をして魔除けを吊すほど魔に対する不浄を入れることを格別にいみきらった。

10日間は、生木に近いマキを使って茶湯をわかしたり、食事を別にする火の制度をとった。不浄（ブソーズ）とは、運気が心身ともに低下して魂が不安定の状況である。精進してその日々の儀礼を通過する。8日目、10日目にソーズをして産室から親子が初めて出るのである。

○シラクーズ（白不浄・産室・三番産）

シラクーズは、産室を云い部屋は三番座か二番座のウラに部屋を設け、四隅にアジという竹の×形状を吊し、まじないにした。又、中央に地炉（ズーユ）をつくり別火して不浄を入れなかった。葬式法事に出た人は入室出来なかった。

○アガスティダウガマシ（初出・天から印をもらう）

赤子（新生児）、（アカンガ〈方言〉）は、シラヤーとかシラクーズと呼ばれる特別の部屋に10日間又はそれ以上、産室に籠もって別火をする。8日目又は10月にソーズバリと云って東の一番座より庭に出て、テダを拝む。

○ナーフィヨーズ（命名祝い）

命名祝い・新生児に始めて神の名（童名）ーヤラビナを選定し命名（ナーフィ）する儀式をナーフィヨーズと云った。童名は父方、母方の祖父母の名前やカマド・満戸など火の神や世の主などのように生まれ里の神名を用いてクジに依って三度選別し、同じ童名が三度重なるようにして落としていったと云われる。

豊年祈願と家の願い

○プーズ（穂利のこと）

プーズとは、豊年祭のことをいう。八重山のオンプールと同義で豊年祭のことである。夏祭り（狩俣村）粟プーズを四ムトウにて行う。ニーリアーグを謡う。他の村では旧6月に日取りして、アープーズをして豊年祈願祭行事を行う。

○ンム・アーのポップー

ンモヤ粟の初物、初穂の予祝の願立をいう。初穂祭りとは、芋や粟の初物を供えて豊

作を感謝し予祝を願立すること。

願ほどきと呼んで二年の神願いが、個々の神年、祭祀の願いの終了を報告する神願い。

○タティバン

家庭円満の祈願事や個人の神への祈願を立てることを「願立て」とか「タティバン」と云う。

○ガンブドキ（ブドチニガイ）満散のこと

ここでのガンブドキは、家庭での一年間の運氣や祈願事の感謝と託宜を天の神に手向けため、カマド神に線香を立てて来年の大世を判事してもらう神事をブドキ願いと云う。

共同体の聖なる時空と祈願祭祀

○シラス（他界・シラは（白）のこと）

ニイーリに誘われるシラスは、白の他界、海上他界を云う。ニスマ（根島）と同意味である。

○ニスマ

根の島（聖地）であり、神々の来訪する場所・祈魂の去来する他界。

○カンヌツ（神の道）

御嶽のイビ、杜や山に入る通り道。（通路は、神人が往来する道を云う。）祖神が巡行する神の道を「ヤマンツ」・「ウブンツ」等があり、御嶽のイビや里の聖地へ往来する道をも神の道と称していた。現在も神道をふさぎ、断崖のような地形に道路を断つ時は里人や信仰者に祟りを起こすと云う。

○シツプーイ（シツの祭事）（豊年の予祝）

シツとは、旧6月のキノエンマの日、この日を「シツ」と呼んでソーズバリ（精神進）をする。シツの日は早朝に若水（スデイ水）を汲んだり、その水を飲んで若返ると云われ、畑の世を拾ったりして新年の如き姿がある。

○ミャークツツ（宮古＝現世（アカラユーのこの世・楽しい月日の浄土・楽土）節日

ミャークとは、今の世の楽しい豊年完納の喜びを鳥をあげて祝い、男性をムトウを中心にマスムイと呼ばれる。鳥の赤子の一年生を共同体（ムトウ）の神々に字をもらい守護してもらう。このムトウ行事は、島の年中行事で重要な祝賀行事であった。

○八月十五祝 網引き

狩俣村、宮国村、砂川では、現在、網引きが行われる。網引きをして豊年の予祝いを祈願する。狩俣では子供達を中心にキャンをもって引き網をつくるが今日ではロープになっている。旗頭の代わりにマーニの葉を用いる。

○ユーニブドウ（大浦・島尻）

ユーニとは、神平芸能の一つで円を巻いて歌い踊ること。大浦村では、101日の16日より18日まで産いて12名のサスンマ達が世の願いをこめた円陣の巻踊りをする。大浦村では、ユーニはユーニのアヤグがあり、神女達が謡い円陣の巻踊りをする。

○トクルフン

ユーニのアヤグがある狩俣村でもトクルフンがあり、ユーニブドウがある。狩俣村での旧1月18日、ヨーズ（旧16日）をはさんでのムトでの神女達がザを中心にして一年中の拂い清めと家々（神女）や公民館のイビ（トクル）を踏み固めるため、円陣を組んで「トクルフンのアヤグ」「元の道」「豊年のクイチャー」へと移行しながら踊り嘉利吉をつける。トクルフンとは、公民館（ブンミヤー）を踏みうたうことを云う。

※参考文献（参考図書）

- 『沖縄の民俗資料集』(1) 琉球村政府文化財保護局
- 『沖縄のシャーマニズム』 桜井徳太郎
- 『沖縄の御願のことは』 高橋 恵子
- 『沖縄県史・民俗編』 県教育委員会刊
- 『沖縄の民間信仰』 窪 徳忠
- 『沖縄の外来宗教』 窪 徳忠
- 『沖縄大百科事典』 沖縄タイムス社
- 『平良市史・民俗編』 平良市市史編さん室
- 『沖縄の社会組織と世界観』 渡部 欣雄
- 『那覇市史・民俗』 那覇市史編さん所
- 『民間信仰辞典』 桜井徳太郎編
- 『民俗学辞典』 民俗学研究所編
- 『日本民俗学辞典』 大塚民俗学会編
- 『神と佛』 山折 哲雄
- 『隠された神々』 吉野 裕子
- 『日本の憑きもの』 吉田 禎吾
- 『民俗』 沖縄大学学生文化協会
- 『沖縄民俗』 調査報告書 琉球大学民俗学研究クラブ